

明と清の滅亡・興隆、交替期、異民族間の混血もさかんで、齒の奇形も多発したのではあるまいか。

(大阪市)

#### 46 囉嚩拏説救療小兒疾病經の紹介

大 高 興

本經は、いわゆる密教の經典であつて、現在の最も代表的な大藏經である大正新脩大藏經(全百卷)の中の「印度撰述部の中の密教部」に収録されているものである。

この經本は、清の雍正十三年(西曆一七三五年)に勅を以つて製作された「清版大藏經」(別名「竜藏」)の一本であるらしく、その「經」部に属し、「臨」の部四十經同函の中の第二冊目であろうと推定される(実物を展示予定)。

この清版大藏經は、わが国にあつては、ひとり京都の竜谷大学にのみ襲藏されている珍籍といわれているが、当本は、昭和三十四年三月、青森県弘前市の某寺から、同市内の花田骨董店に渡つた中の一冊である。

訳者、法賢は、北天竺、カシミール出身の梵僧で、宗の

太平興国五年（西曆九八〇年）に来華し、皇帝太宗に謁し、訳経院で生涯、密教関係の經典の翻訳に従事している。真宗の咸平三年（西曆一〇〇〇年）寂。生前、紫衣を賜り、明教大師その他の号を授けられている。

しかし、本經の日本語訳は未だ存在せず、また、これについての研究論文の類も無いとされている。

#### 本經の要旨

囉囉拏鬼王が、世間の小児が生まれてから十二歳に至るまでの間に、種々の疾病に罹るのを哀れんで、その疾病を癒す方法を説いているもので、「小児に種々の疾病が起るのは、十二曜母鬼という者が世間を遊行し、昼夜分に於いて常にその機会をうかがい、小児の睡眠時や行往坐臥に於いて、種々の相を現わして、小児を驚かせ、常態を失わしめ、かくして疾病を起すのであり、小児の発病の時日によつて十二曜母鬼の中のどの鬼が病に罹らせるのかがわかる。

その鬼にに応じて、相應の呪法を行すれば、鬼は退散して小児の疾病はことごとく治ゆる。」と説いている。

#### 考 察

一、本經は、科学つまりサイエンスとしての医療ではなくて、真言密教の呪法の立場から説いている經典である。

二、一般にどの經典でも、それを説く説法王（仏陀など）と聴衆（弟子や信者）との間で、話しのやりとりが行われ、最後に聴衆が歓喜して退くことになっているに對し、本經では、説法王が、歓喜して退く、と記されている。これは甚だ妙な感じがする。恐らく誤訳したのかも知れない。

三、本經の原文は恐らく、サンスクリット語か、あるいはその形の崩れた古代インド語であつただろうと思われる。しかしサンスクリット語を古代において中国語（支那語）に翻訳する場合、または音写する場合、時代や学派や訳者等の別によつて、翻訳や音写の上での一定の法則が無かつたので、本經のようにあて字で書かれているダラニを原語に復元することは困難である。

四、本經は果たして仏教の經典なのか、それとも民俗信仰の呪法の書なのか、はっきりしないが、少なくとも仏教思想を説くオーソドックスな經典でないことだけは確かである。このことは「仏經」の名を冠せられて、翻訳され、「仏經」群の中に混入されているものが、しばしば存在す

る事実からも肯定し得ると思う。

(国立療養所松丘保養園)

47 『紅夷外科宗伝』図版成立へのスク  
ルテタス(Scultetus)の外科書 *Arma-  
mentarium chirurgicum* の影響

蒲原 宏

長崎大学図書館医学部分館蔵の『紅夷外科宗伝』(宝永三年一七〇六)は、来日した蘭医 Willem Hoffman から一六四九年刊 schipper 版のバレル外科全集 *De chirurgie ende opera van alle de werken van Mr. Ambroisius Paré* を譲られた榎林鎮山が、それを原典として編訳し、中国の『外科正宗』にならひ成稿したとされていた。極似した著作として、西玄哲の『金瘡跌撲療治之書』享保二〇年一七三五(京大蔵)、『和蘭外科宗伝』正徳四年一七一四(国会図書館蔵)、『南蛮外科手術図巻』寛政二年一七九〇(神戸市立南蛮美術館蔵)、『紅夷外科宗伝』年代不詳・旧嵐山家本(香雨書屋蔵)、『金瘡跌撲療治之図』年代不詳(伊良子光孝氏